目次

聖訓摘要……本多日生
釋尊の大調和主義……國友日斌
常樂院文庫の建設……國友日斌
信仰と疾病……醫學博士 石田藏
童話 籠の目白……岡山三治郎
欣快……長谷川義一
記事報導……國友日斌

第三十年五月號

教化會館正面

教化會館開館式・極上にあるる式詞を述る國友館主・右より見玉師・坂井・杉田・今井・豐田利三郎氏・佐藤中將・本多閣下・井村臺下・武田文學士・態井同會者。
當日は來聽する者實に千八百餘名の盛況。

『教』　第一卷第三號　目次

一御製數首　本多日生
一建國の大精神　日本政記
一應神天皇紀論賛　添田壽一
一破壞思想と青年　床次竹二郎
一信念と第二維新　聖德太子
一以和爲貴　モルス・ソーレス氏　岩野直美譯
一社會主義評論　志賀重昂
一世界當代地理　立正大師
一聖語數節　高島平三郎
一教養逸話　王陽明先生
一傳習錄の一節　德川光圀卿
一義公隨筆　今泉定介
一國體觀念　永井米藏
一勞働問題の解決　南洲先生
一遺訓數節　心地觀經
一人皆四恩を荷ふ　本多日生
一東洋思想の大共通點
一雜報
以上

蓄音機
レコード

大僧正本多日生師吹込
一、宗教信仰の必要
一、佛教信仰の歸結
一、佛教の卓越せる所以
一、聖語
二枚四組二圓四十錢（外二送料三十錢）
取次所　統一編輯局

本多日生猊下著小冊子
（現在品のみです賣切れ絕版になつたものは注文さるゝと餘計な手數で困ります）
自我偶講義　一部金廿錢送料金貳錢　十部金壹圓送料共
修法勸行の心得　一部金十五錢送料貳錢　十五部金壹圓送料共
一切の勝利は人格にあり　一部金五錢稅二錢十部三十五錢百部三圓稅共
宗教の五綱　一部金拾五錢送料金貳錢　十五部金壹圓送料共
教育勅語と思想問題　一部金貳拾錢送料金貳錢　十部金壹圓送料共
名古屋市東區田代町城山
統一編輯局
振替名古屋一〇八一九
多數購讀の節は特別割引す御相會下さい

天童入場

大導師慶讃文を讀む

聖訓摘要（第壹）

本多日生

御遺文の講義も「聖訓要義」と題して肝要な御書は既に講じ了りまして、續いて續集の方に就て要文をお話したのでありますが、繙つて御遺文の全体、即ち本集の方に就て未だ講せざる御書の中の、特に注意すべき點々を拔き出して、極く簡單な解說を致したいと思ひます。未だお話をしない中にも、無論結構な御敎訓が多々ある譯でありますが、茲には私の特に感じました點、而もその中から極く際立つた點を摘出するので、成るべく少ない方が宜からうといふやうな考へで摘出して居るのでありますから、更にこれを擴げて數多く要文を引かうとすれば、殆んど限り無い要文が出て來る譯でありますが、今お話するのは成るべく特別な點といふやうな考へで申すのでありますから、これだけで後に大切な敎訓が無いといふやうな意味ではない、その點は豫め御承知置きを願いたい、是から遺文錄の編年体になつて居る順序に依つて申上げやうと思ひます。一番最初が

戒體即身成佛義

といふので、大聖人御年二十一歳の御撰述であります。鎌倉に學問に行かれて、ちよつと淸澄山にお歸りになつた時に書かれたので、未だ比叡山の方にも勉强に行かれない前であります。併しその二十一歳

の未だ叡山にも學問にお出でにならぬ前に於て書かれたこの御書が、中々立派な御議論であります。尤もこの場合には眞言の思想が本になつて居りますから、法華經よりも眞言の方が有難いやうな風に考へて居られたやうな言葉も一二ありますけれども、全体の議論の組織が非常に堂々たるものであります。この中に私は二つの大きな注意點があると思ふ、その一つは

一切の戒を持つとも五戒無ければ諸戒具足すること無し、五戒を持てば諸戒を持たざれども諸戒を持つに爲りぬ。諸戒を持つとも五戒を持たざれば諸戒も持たれず、故に五戒を具足根本業清淨戒といふ。されば天台の釋に云く、五戒は既に是れ菩薩戒の根本なりと、諸戒の模樣を知らんと思はゞ能く〳〵之を習ふべし。（遺文錄八）

と書かれて居る點である、この御文章の大意は、佛教の所謂宗教的の道德、信仰に入る以前に、人道的一般的の道德を大切にしなければならない、五戒といふのは世間で守るべき道德の箇條で、支那で言へば人倫五常、日本で言へば教育勅語といふやうなものである。さういふ世間の道德を輕んじて特別な宗教の道德信仰にのみ傾くといふことは宜しくない、といつて洵に叮嚀にそのことをお示しになつて居る。二十一歳の御時に既にこの道德的の着眼からして宗教を捌いてお居でになつたことが、後年『立正安國論』となり、「天晴地明」の日蓮主義となつて居るので、餘程大事な點と思ふのであります。モウ一つは斯ういふ事である。

經に云く、今此の三界は皆是れ我が有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり等云々。法華經を知ると申すは此の文を知る可きなり、我が有と申す「有」は其れ眞言宗に非ざれば知り難し。（遺文錄一五）

後段の言葉は眞言の方に傾いた言葉でありますけれども、併しそこに面白味があるので、法華經を知るといふことは、佛が「今此の三界は我が所有である」と言はれたこの文を了解しなければならぬ、他の諸法實相の妙理であるとか、種々なる法華經の教義を心得ても、佛が宇宙を支配して居るものだといふこの大人格者を認めんければ法華經を知つたことにならない、さうしてその意味は天台宗では判らぬ、眞言宗に來なければ判らぬといふことを書いて居られる。これが非常に大事なことで、後年『開目鈔』となつて現はれて來たものであらうと私は考へます。既に二十一歳の時の『戒体義』の中に、道德に關する着想と本佛に關する着想の二大要點が現はれて居り、一が後年『立正安國論』となり、一が『開目鈔』になつて現はれたのでありますが、洵にその意味を考へますと、早くからそこに着眼をなさつて居つたといふことが能く判るのであります。次は

戒法門

であつて、御年二十二歳の撰述であります。これには

戒と申すは一切の經論に說かるゝ數は、五戒、八戒、十戒、十重禁戒、四十八輕戒、二百五十戒、五百戒、乃至八萬四千戒、此の如く戒品多しと雖も始め五戒を戒の本と申し候ぞ。（遺文錄一六）

と言つて、戒がいろ〳〵あるけれども五戒が本だといふことを擧げ、又

世間の念佛者げに夢に智者見えたりけるなんど申し候ぞ、天狗の見せたる夢なり、只道理と經文とを本とすべし。（一九）

と言つて、念佛者などが夢を見てどうだ斯うだといふやうなことをいふけれども、その夢ナンといふものは天狗に魅れた夢である、教を測くには道理と經文に依つてやらなければならぬといふことをお示しになつた。茲に世間の道德の重んずべき所以と、人類共通の道理といふ眞理の重んずべき所以と、釋尊の經文を重んずべき所以とが明かに示された。又

わずかの小善成佛と申すは是偖に候なり、淨土宗の學者傳教大師の釋を引ども、末法には持戒の者なしと云ふ釋の意を知らずして人人を迷はす法門なり、恐るべし恐るべし。（二三）

法華經には小善成佛といふことがあつて、法華經の信仰が定まれば世間の小さな道德の中にも廣大な意味が含まれて、その世間の道德の中から佛に成る力も現はれて來るのである。然るに淨土宗の人等が傳教大師の「末法は無戒」といふ言葉を誤解して、道德は要らぬものだ、唯だ阿彌陀を信じさへすれば道德は守らなくても宜い、假令惡人であらうとも救はれるといふことを强く言うて、道德的の感化を殺してしまつたのは、人々を惑はす教であつて、大きな間違ひだといふことを說かれて居る。それから又

五戒は佛いまだ出世し給はざる時は、外道等も之を持つて天上に生ずと敎ゆるなり。但し持犯ばかりを沙汰して其の上に佛法を聞かんことをば知らざるなり。佛世に出て給ひて此の五戒を持つて人身を受けて其の上に佛法を聞いて悟り開くと說き給ふなり。然れば此の五戒に樣々の功德を備へて戒として攝せずといふことなしと說き給ふ。此の五戒を根本として大乘の諸戒も具足するなり、故に此の五戒をば具足根本業淸淨戒と名くるなり。此の五戒若し破れつれば一切の諸戒皆破る、五戒は破るといへども大乘戒は持ちたりといふ事はこれ無し、根本戒と名くるは此の故なり。（二五―二六）

この五戒といふのは佛が拵へたのではなくして、印度に古くから傳はつて居つた世間の道德である。併し婆羅門の者共はこの世間の道德だけに滿足をして、それ以上の高い宗教の信仰を求めなかつたのである、そこが間違ひだけれども、この五戒といふ世間の道德は何處までも大切にしなければならぬ、この五戒を根本として大乘の諸戒も具足するのである、この五戒といふ所謂世間の道德を捨てゝしまつて、別に佛教の道德があるといふ譯ではない、それ故にこれを根本戒と稱するのである。尙ほ續いて

法華經の開會の法門と申すは此の五戒を開會するなり。經文委しく見るべし云々。鷄が子を育み、烏が子を悲しむまでも皆五戒の謂なり。五戒といふは佛因なり、然ればかゝる畜生までも佛法を行ずるにて侍るなり。（二六―二七）

法華經の開會といふことは、世間の道德を開會する、今の言葉でいへば世間の道德と法華經の信仰を疏通して行くのである、その意味を法華經に依つて能く々々研究しなければならぬ。人間の道德の如何なる場合の事でも、如何なる小さい事でも、善は善として尊いといふのはこれは無論であるが、尙ほ進んで論すれば鷄が子供を育てる爲めにヒヨコに米を喰はして居るのも、或は卵を溫めて居るのも、その親切はやはり五戒の意味になつて、その優しい精神は非常に尊いものと言はなければならぬ。烏でもあの子供を可愛がる、そこに佛に成る原因が具はつて居る、それ故に烏の子を可愛がる有樣も廣い意味に於ての佛法修行である、鷄が佛法を修行して居るものぢや、といふ風に考へなければならぬといふ事を論じてある。非常にそこが面白いので、世間の道德などは要らぬものぢやと言つて打消すのでなく、鷄が卵を溫めて居る、あれも或る意味から言へば佛法の修行ぢやといふ風に、人間の道德を尊んでお出でになつた、この着眼が非

當に有り難い事で、何處までもこれは日蓮聖人一代の主張を貫くのであります。この『戒法門』は日蓮聖人が未だ京都に學問をなさらん時分の作であるが、清澄山の勉學の中に既に斯ういふ考へが確立して居つたのであります。次は

色心二法鈔

これは三十三歳の時の御撰述でありますが、最初に斯ういふ事がある。

先づ此の旨を心得ん者は大慈悲心菩提心を意得べし、其の故如何となれば、世間の事を案ずるも猶ほ心をしづめざれば意得難し、何に況んや佛教の道生死の二法を覺らんことは、道心を發さずんば協ふべからず。（遺文錄一二八）

これは法華經の止觀の學問をするにも、眞言の學問をするにも、面倒な學問に入るその前に第一慈悲心といひ菩提心といふものを打立てなければ駄目だ、觀念と言つても唯だ冷かなる理窟を考へるのではなくして、心をしづめて道心を發す、道心とはその道を得やうとする所の淨い精神を打立てることである。その道心が出れた時には『止觀』を學んでも眞言を學んでも駄目だといふ風に、精神的なる立場から勉強をせよといふ事をお書きになつて居る。次は

師子頰王鈔

といふ二十五歳の作があります。これは佛の御傳記と佛人滅以後の佛教歴史のことに就て、極く大体の事を書かれた短い御文章で、別段摘出するものもありませぬ。次は

堯舜禹王鈔

これは二十六歳の作で、叡山勉學中の著書でありまして、別段大したものでは無いけれども、儒教の方の曾參といふ親孝行の人の事を書いて居られます。但し斯ういふ叡山勉學中に於ても、儒教の親孝行の者などを特に詳しく書かれるといふのは、後年日蓮聖人の主義及び人格に非常に鮮かに現はれて來た所であらうと思ひます。普通の當時の坊さんはそんな方へは心を用ひずして、やはり面倒な眞言、止觀の煩鎖な哲學に頭を入れて居つたのでありませうが、日蓮聖人は實際問題の親孝行の者の事を詳しくお書きになり、それに關して儒教の道德に關することがいろ〳〵擧げてあります。これは日蓮聖人の學問、考察の中に、單に佛教ばかりでなく儒教の方に眼が屆いて行き居つたといふことが、この御書に依つても證明される次第であります。次は

諸願成就鈔

二十八歳の作でありまして、釋迦如來の菩薩行より六波羅密に關して詳しくお書きになつて居る。これも日蓮聖人が自ら佛道修行の決心を示す上に、いろ〳〵佛樣の尊い修行をお擧げなさつたものであらうと思ふ。次は

女人往生鈔

これは三十二歳の撰述でありますが、法華經の桑王品は阿彌陀の名が擧つて居つて、法華經を修行する者も阿彌陀の所に行けるといふ文があつたから、それに關して詳しく意見を述べられた。決して法華經は阿彌陀如來を勸めた譯では無い、阿彌陀如來の所に行かうと思へばそれは行けるけれども、その意味は淨土宗や眞宗で言うて居る阿彌陀とはまるで意味が違ふといふことをお書きになつて居ります。それから

十王讃歎鈔

三十三歳の作でありますが、これには人が地獄に行つて次第々々に取調を受ける十人の王樣の事が書いてあります、これは斯ういふやうな傳說的なことが支那あたりに非常に行はれて居りましたからそれを擧げられたのであるが、要するに王樣の調べの言葉の中に、人間に居る時に浮か〳〵して居つて遂に地獄に來ては取返しが附かぬといふ光景を書かれて居るのであります。罪人を糺問する光景及びその言葉は如何にも痛切なものでありますから、それを讀めば如何なる者でも邪念を翻すことが出來るであらうと思ひます。

成佛得道を期せんと思はゞ、時國相應の妙法の唱へをなし、以信得入し給ふべし。而るに信心疎かにして三途に墮して重苦を受ん時悔るとも益なかるべし、譬へば網にかゝる鳥の高く飛ばざる事を悔るが如くなるべし。（遺文錄六一）

鳥が網にかゝつてしまつてから、モウ少し上を飛びさへすれば網にかゝるんぢやなかつたと後悔しても、モウその時には鳥の首は網に締められてしまふやうに、人生の生活を今少し高い方面、所謂道德宗教の方面に心を注げば宜かつたのに、墮落したる生活を遂げたが爲めに斯ういふ恐ろしい惡道に墮ちて網に引かゝつたのだといふことが書いてある。又

されば孝行を先として追善を致すべし。唐に叔雄といふ者は身を投げて孝養を致しき、それまでこそなくとも信心の歩をはこび、何ぞかく菩提を祈らざらんや。孟宗が雪の中の筍、王祥が氷の上の魚、是れは孝の志を感ずるところなり。況や孝養を致す家には梵天帝釋四大天王住し給ふと云へり、これは正しく如來の金言なり、誰かこれを疑はんや。然れば此の如き輩は皆諸天の擁護を蒙むる者なり。但し孝養に三種あり、衣食を施すを下品とし、父母の意に違はざるを中品とし、功德を回向するを上品とす、現在の父母にだに尙ほ功德を回向するを上品とす、況んや亡親に於てをや。雪中の筍何かせん、法喜禪悅食の味にはしかじ、叔雄身を投げても更に出離生死の便りにはならず、只善根を修して父母の得脫を祈るべし。（七一―七二）

段々さういふ風にお述べになつて、父母の回向といふことを詳しくお書きになつて居る。それで此處には「孝養に三種あり」といふことをお示しになつて、一番勝れた親孝行は自ら善根功德を積んでそれを親の方に回向するといふことである、現在生きてござる親にでも何が一番大事かと言へば、自分が德を積み善を重ねて立派な人になつて、その功德をお別けして行くのが親に對する第一の孝行である、況んや亡くなられた親に就ては他に方法は無い、自ら善根功德を積んでこれを酬ひなければならぬ。「雪中の筍何かせん、法喜禪悅食の味にはしかじ」と書かれて、孝養の事が詳しく述べられて居る。それから次に罪人が叱られ

て居る所の言葉がある。

其の時大王、汝今地獄の相を聞きてさへ此の如くおぢ恐る、況んや地獄の火に燃えん事乾きたる薪を燒くが如くならんをや。それ火の燒くにあらず惡業の燒くなり、火の燒くは消しつべし、惡業の燒くは消すべからず。此の如き重苦を受けん事只汝が心一つより起れり、頼まんとても頼み少なきは妻子の善根なり、其の上沒後の追善は七分が一こそ受れ、縱ひ待ち得たりとも浮ぶほどは弔はじ、存命の中に悔ひずして今に至つて後悔すとも何の及ぶところかあらんとて、即ち地獄へ遣はさるなり（七九―八〇）

といふので最後の決心がついて、大審院の判決が下つてとう〳〵地獄の方に送られるといふことになる。これは傳說のやうな事が混つて居りますけれども、併し一般の佛敎の感化としては能く言ひ現はされて居る御遺文でありますから、一二拔いて置いたのであります。次は

八大地獄鈔

御年三十三歳の時の撰述であります。これは地獄の光景とその四人の苦みを書かれて居る、殊に毛血法師の事が出て居つて、それは前に地獄に行つた事を覺えて居る坊さんで、その地獄の時の事を考へると毛穴から血が吹き出るといふので毛血法師といふ名が付いて居る、地獄に行つた時の苦みを覺えて居れば、考へただけでも毛穴から血が出るといふ。

昔毛血法師といひし人は、必ず一日に一度衣を洗ひ給ひしを、御弟子等あやしみて其の故を問ひ奉りしかば、六道の中宿命通を得つれば過去の事を知る。この故に我れ宿命通を得て過去の事を思へば、地獄に墮ちて苦を受けし事を思ひ出すに、紅の血身より出で衣を染むる故に、賤しき物なれども血の染みて穢らはしければ洗ふなりとぞ答へ給ひける、只思ひ出すだにもかくこそ候ひけれ。（八道文錄二）

地獄に墮ちた時のことを追憶しても血が出る位のことであるから、事實地獄に墮ちたら如何ばかりであらうかと仰せられて居るのであります。次は

蓮盛鈔

これは三十四歳の撰述で、主として禪宗の誤りを論破せられて居るのでありますが、特に摘出することもありませぬ。次は

諸宗問答鈔

同じく三十四歳の撰述であつて、これは天台宗が爾前の圓と法華經の圓と同じいといふ謬見を起したことゝ、それから禪宗、眞言宗、念佛宗等の間違ひを破して居られる。この事はモウ何處にも後には出て來ることで、今迄講じた御遺文の中に大体ある譯でありますが、特に一箇所引いて見れば

譬へば民の身として國王と名乘らん者の如くなり。如何に國王といふとも言には障り無し、己が舌の和かなる儘にいふとも、其の身は即ち土民の卑しく嫌はれたる身なり。又瓦礫を玉といふ者の如し、石瓦を玉といひたりとも曾て石は玉にならず、汝がいふ所の即身即佛の名目も此の如く有名無實なり。（遺文錄一〇三―一〇四）

これは禪宗が悟つたと言つて威張るのを戒められたのであつて、卑しき身分の者が「俺は王様だ」と威張つて見ても、或は石を持つて來て「これは玉だ」と言つて見ても、それは唯だ言ふ事は幾らでも言へる、舌の軟かなる儘に言ふことは何ボでもいへるけれども、併し石は石である、決して玉ではない。吾々が濫りに佛と同じいとか、凡夫即佛ぢやといふやうなことを言つてもやはり凡夫である、佛の性は具へて居るけれども、己れはその性が十分に現はれ得ずして凡夫の人間に生れて居るのである。それを少しばかり本堂の隅の闇い所で坐禪したからと言つて、直ぐ佛樣に成るといふやうな譯には行かないといふことを書かれて居る。次は

念佛無間地獄鈔

であつて、念佛宗の誤りを評論されて居るのであります。

淨土宗には現在の父たる教主釋尊を捨て佗人たる阿彌陀佛を信ずる故に、五逆罪の咎に依つて必ず無間大城に墮つべきなり。經に今此の三界は皆是れ我が有なりと說き給ふは主君の義なり、その中の衆生は悉く是れ吾が子なりといふは父子の義なり。而も今此處は諸々の患難多し、唯だ我れ一人のみ能く救護を爲すと說き給ふは師匠の義なり。（遺文錄一〇八）

念佛無間の依つて來る論據で、唯だ法華經に反對するからとの理由のみではない、この本佛釋尊を忘れて迹佛たる阿彌陀の方に行く、主師親の三德者を輕んじ忘れるといふ所に論據がある。これが一番大事な點でありますから、日蓮聖人がこの『無間鈔』に於て斯の如くはつきり言はれて居る事を忘れぬやうにしなければならぬ。若し日蓮宗の方で之を忘れて、釋迦如來が我等の三德者であるといふことが判らなくなつたならば、念佛無間などといふことは意味をなさんことになるのである。鬼子母神や帝釋樣を拜んで居つて、さうして外に對して念佛無間を言ふは論理が成立たぬのである。この點は日蓮主義者が一日も早く自覺しなければならぬ、之を誤魔化して居る日蓮主義者が今尙ほ澤山あるけれども、それは全く惡い事である、自分の方の立場に於て本佛を忘れて居つて、さうして淨土門を攻擊するといふ理由はない。その次は

一生成佛鈔

これも三十四歲の時の撰述でありますが、吾々の心の事と、この我等の心が妙法蓮華經と號けられる所以とを說かれたので、天台宗の思想その儘を書かれて居る。この思想が後に累をなして居りますが、この場合に言はれるのは未だ日蓮聖人の大事を現はさぬ時分でありますから、心が妙法蓮華經だといふことを言はれて居る、後にも言ひますけれども、我等の心も妙法蓮華經であるし、宇宙の實相も妙法蓮華經であるし、佛も妙法蓮華經である。併しさういふものに號けて名前を呼んで居るのでは、信行にはならないのである、自分の心が妙法だといふやうなことを言つて「妙法」と呼んで見た所が何にもならぬ、我等の唱へて功德の得られる妙法は、釋尊の因行果德の功德を單められた妙法でなければならぬ、自分の心が妙法だといふやうなことならば、それは觀念觀法して自分の心を悟るは宜いけれども、「吾が心は妙法だ」といふので唱へて見た所が、仕方が無いのである。その位のことが判らぬ間は一切の佛敎は判るまいと思ふ、信行としてはそこに功德を與へられなければならない、頭を下げて賴んで事が成就するのだから、迷うて

居る自分に頭を下げて見た所が何にもならぬ、貧乏人が貧乏人の所に行つて金を貸して呉れと言つて頭を下げて見ても仕方がない。無學の者が先生の所に行つて頭を下げれば教へて貰へる、後覺者が先覺者の所に行つて頭を下げればそこに導かれる、病人がお醫者の所に行けば病氣を癒して貰へるけれども、腹が痛いからと言つて「腹痛樣々々々」といふやうな事を幾ら言つて居つても癒りはしない、そんな事では宗教の信行は成立たないのである。宗教は自分の眞心と偉大なる力とを結びつけて、そこに感應利益を說くのである、然るに感應利益を與へて呉れる者無しに、唯だ自分だけを「さういふものぢや」といふ名前をつけて見た所が、何にもならぬ。そんな事では信行は立たない、吾が身即妙法なりといふことに依つて行くならば、觀念觀法に依つて吾が妙法の當体を悟り出さなければならない。然るに觀念で行くでもなく信行で行くでもない、どちら附かずになつて居るのが多くの日蓮主義者の迷ひである、學問不徹底の致す所である。それが長い間の累をなして來て居るので、極く反對の方から言うたならば、「日蓮聖人が天台から殷化し得ない」といふ批評もあるのである、專門の他宗の學者から言うたならば、今の日蓮門下がどつち附かずで、觀念でもなければ信行でもない、マゴ〳〵して長い間澤山の者が濟まして行くといふものは、日蓮聖人の思想が鮮明を缺いて居つたが故に斯の如くなつて居るのだといふ批評がある。それは甚だ不都合な事だけれども、早く改めないといふと「ナンボお前がさう言つたつて、事實この長い間大勢がマゴつくといふものは、日蓮聖人のマゴついて居る反映ぢやないか、論より證據ぢやないか、日蓮聖人の遺文はこの通り活版になつて彼方此方で研究されて居る、それでもやはりマゴ〳〵するとすれば、遺文全体がマゴついて居るから來たる結果ぢやないか」といふ批評が既に下つて居る位な事であるから、日蓮門下が眞に日蓮聖人に忠實であるならば、自分の思想をもつと筋立つやうに調べて行かなければいくまい、これは實に大事なことであります。それ故に斯ういふ御書は未だ眞實を顯はさゞる時分の御書である、その事は『當体義鈔』、『觀心本尊鈔』等の要義の場合に私が詳細に論明致して置いたことでありますが、唯ださういふ思想が初めの頃に動いて居る、これは天台の思想その儘だといふ事を茲に論明して置くのであります。次は

主師親御書

同じく三十四歳の撰述であつて、これは釋尊の三德をお說きになり、併せて六道流轉の苦みを說かれて居る。次は

垂迹法門

三十五歳の撰述であつて、日本の神樣は佛の垂迹であるといふ事をお書きになつて居る。次の

回向功德鈔

は地獄の苦しい有樣と、それから功德を回向しなければならぬ、その親に對する追善回向は洵に善い事だと書いてあります。次の

十二因緣御書

は、十二因緣の大要を說かれたので、同じく三十五歲の撰述であります。それから

三八教

これは三十六歲の撰述でありますが、三種の教相と申して天台の『玄義』にある事を書かれた。それから天台の教相の四教五時、それから相待妙、絕待妙、心法妙、衆生法妙、佛法妙等の『玄義』にある要點を拔き書きせられたに過ぎないのであります。次の

三種教相

といふのも先づ同じやうなことでありますが、妙樂の「二十の大事」と傳教の「秀句十章」が擧つて居る、前の三八教とは少し違つて居るので、この方は大分詳しく書いてあります。それから

衣座室御書

は『法師品』の衣座室の三軌と、菩薩の十地行の名前とが擧つて居る。その次の

六凡四聖御書

は、六凡といつて地獄から餓鬼、畜生、修羅、人間、天上までと、四聖といつて、聲聞、緣覺、菩薩、佛の名前を列ねて、法華經に依つて二乘が成佛を許されたといふ經文をお擧げになつた迄の極く短かい御文章であります。次に

一代聖教大意

これは三十七歲の撰述でありますが、大分詳しく一切經に關する判釋を書かれたので、大体は天台の四教判であります。この中には大切な事も段々ありますが、モウ一般の研究の上に明かになつて居ることであるから、特に摘出致しませぬ。次は

一念三千理事

でありますが、これは『聖訓要義』の場合に詳しく講述を致して置きました。次は

十如是事

これも名高い御書でありますが、三十七歲の撰述でありまして、法華經の方便品の十如是から關係を取つて述べられて居るので、一箇所御紹介して見やうと思ふ。

下根の人は延びゆく所なくてつまりぬれば、一生の内に限りたる事なれば、臨終の時に至つて諸々の見えつる夢も覺めて寤になりぬるが如く、只今まで見つる所の生死妄想の邪思、ひがめの理はあと形

もなくなりて、本覺のうつゝの覺にかへりて法界を見れば、皆寂光の極樂にて、日來賤しと思ひし我が此の身が、三身即一の本覺の如來にてあるべき也。（二〇三―二〇四）

如何に下根の者でも法華經の修行に依つては今度成佛が出來るのである。その場合には今まで迷つて居つた凡夫と思うたその身の中から三身即一の如來が現はれて出るのである。それは無論さうであるけれども、それは今のやうな凡夫ではない、その中から現はれて行くので、その覺を開けば今迄の凡夫と思ひし者が本覺の如來ではあるけれども、唯今覺らずしてこの儘本覺といふのではない。この意味は洵に觀難いことであります、大抵の大乘宗の間違ひがそこから起るのであります。覺つて見れば今迄の迷ひの身のその中に佛があると言はれるけれども、覺らぬ中に「凡夫その儘佛ぢや」と言つて居れば、何時迄も迷うて居るのである。晦日の月が段々光つて十五夜の月となる、この十五夜の月はやはり晦日の月と同じだつたといふことは言へるけれども、光らぬ中に晦日の月を以て「これは十五夜の月と同じものだから、光らないでも宜い」といふことになれば眞ッ暗がりになつてしまふやうなもので、晦日の月と十五夜の月と同じいと言つても、それはそこに達してから同じいといふことに行かなければならぬ。學問してえらく成つて居る者を見れば、詰らない者でも學べば同じく學者に成れるといふことは言へるけれども、成らぬ方から「無學な者も學同した先生も同じ者ぢや、同じ者ぢや」と言つて馬鹿な方に引つけるといふことになると、世の中は馬鹿ばかりになつてしまふ。この「即」といふことはその域に達してから言はなければならぬ、今の西洋の惡平等の間違ひもそこから來て居る、支那にもさういふことがある、「舜何人ぞ」といふやうな言葉でも、舜のやうなえらい人間に成らうといふ決心で進んで行く場合には言はれぬことはないけれども、それを誤解して「舜も俺も同じ事だ」といふのでそれを引下げてしまつた時には、非常な間違ひが起る譯である。佛教でも禪學などに於て「佛何者ぞ」といふやうなことを無闇に言ふと、遂には佛をも凡夫に墮してしまふやうなことになるのであるから、この『十如是事』などもさういふ點を能く心得て見なければならぬ、茲にはちやんとある「臨終の時に至つて諸々の見えつる夢も覺めて」とあるので、「覺つて見れば」といふことである、覺らずに迷へるその儘で本覺の如來を極め込むのが習ひ損ひの學問である。さういふことが日蓮主義の中に非常に多く蔓つて居りますが、この「臨終の時に至つて」といふことを否定して、「そんなことは念佛宗みたやうぢや、臨終の時になつてからといふやうなことは手緩いぢやないか、即身成佛が法華ぢやないか」といふやうなことばかり言ふ、實に桁外れのことを澤山言つて居つたやうでありますが、その間違ひは是等の御書でも洵に明かなことである。次は

一念三千法門

であつて、これも『聖訓要義』の中に講述を致したのでありますが、唯だ一箇所申して置きたいことは、

一念三千一心三觀等の觀心ばかりが法華經の肝心なるべくば、題目に十如是を置くべき處に、題目に妙法蓮華經と置かれたる上は仔細に及ばず。（二〇九）

法華經は一念三千の觀法よりも妙法蓮華經の信念で行く方が本意だといふことを茲に漏らされて居るのであります。次は

總在一念鈔

同じく三十七歳の撰述でありますが、この中には哲學思想から見て十分に研究しなければならぬ意味があると思ひます。總在一念といふ言葉は大事な言葉で「總ずれば一念に在り、別すれば色心に分つ」と申して、この根本の一念といふのは、宇宙の全体を精神的に見た言葉であります、一切の萬有の根本に戻せば、唯物といふよりは寧ろ總べて一念にある、一切の物に生命を持たぬ物は無い、第二に下つてそれを分ければ色心――身と心といふことになるけれども、若し宇宙を一元に握つたなれば活きて居る所の大生命である。一念三千といふ事も、一念に三千を具すといふのは、總在一念のことで、即ち三千の諸法一念に在りとして、心で宇宙法界を包んだ思想であります。そこが妙法なのでありますが、さういふ意味がこの御書では餘程よく說かれて居る。その文章を引用致して置きます。

釋籤の六に云く、總じては一念に在り別しては色心を分つと云々。問うて云く、總じては一念に在りとは其れ何なる者ぞや、答へて云く、一偏に思ひ定め難しと雖も、且く一義を存せば衆生最初の一念なりと定む。心を止めて倩々按ずるに、我等が最初の一念は無沒無記と云つて、善にも定らず、惡にも定らず、闇々湛々たる念なり、之を第八識といふ。此の第八識は萬法の總体にして諸法總在して備るが故に、之を總在一念といふ。但し是れ八識の事の一念なり。此の一念動搖して一切の境界に向ふと雖も、所緣の境界を未だ分別せず、之を第七識といふ。此の第七識又動搖し出でゝ善惡の境に對して、悅ぶべきは喜び、愁ふべきは愁へて善惡の業を結ぶ、之を第六識といふ、此の第六識の業感じて來生の色報を獲得するなり。譬へば最初の一念は湛々たる水の如し、次に動搖して一切の境界に向ふと、水の風に吹かれて動ずれども、波とも泡とも見分けざるが如し。又動搖して善惡の境界に對して、喜ぶべきは喜び愁ふべきは愁ふとは、水の波濤と聞れて高く立上るが如し。（二一二―二一三）

最初の一念展轉して色報をなす、之を以て外に全く別に有にあらず、心の全體が身體と成るなり、相構へて各別には意得べからず、譬へばこれ水の全體寒じて大小の氷となるが如し、仍て地獄の身と云ふて洞然猛火の中の盛なる焰となるも、乃至佛界の體と云ひて色相莊嚴の身となるも、只是れ一心の所作なり。これに依つて惡を起せば三惡の身を感じ、菩提心を發せば佛菩薩の身を感ずるなり。これを以て一心の業感の氷にとぢられて十界とは別れたるなり。（二一三―二一四）

次は

守護國家論

これは三十八歳の撰述でありまして、『安國論』を御述作になる準備としてお書きになつたと申して居るのであります。この『守護國家論』の中には七門に分けていろ／＼結構な事が書かれてありますが、一々申せば長くなりますから唯だ要點を申して見れば、

佛の入滅は既に二千餘年を經たり、然りと雖も法經經を信ずる者の許に佛の音聲を留めて、時々刻々念々に我が死せざる由を聞かしむるなり、心に一念三千を觀ぜざれども徧く十方法界を照すものなり。此等の德は偏に法華經を行ずる者に備はれるものなり。（二四五）

釋尊の御入滅は二千餘年を經て居るけれども、法華經には佛は不滅であると敎へて、その敎を信じて居る者から見れば、時々刻々に死せず〳〵といふことが吾々には感じられるのである。即ちお自我偈を讀んで「我れ常に此に在つて滅せず」「我れ常に此に住す」といふことを讀めば、釋尊は實在だといふことに氣づいて來るのである。この佛の實在を意識することが、一念三千の觀法を超越して居る所の功德である、一念三千といふ理論の觀念をやらぬでも、本佛に對して實在の意識を以て渴仰すれば、この方が廣大な德を持つといふことを論せられた。これ等の點は十分に研究しなければならぬのであります、唯だ御遺文を留め度なく雜らつべしに細かく讀んで行くといふことは、勞多くして功が少ない、大切な敎義を抑へたならば文は簡なりと雖もその義のある所を十分に玩味して、尙ほ且つその御趣旨を發揚しなければならぬと思ふ。それ故にこの『守護國家論』の唯今の文章の如きは、日蓮主義者としては所謂眷々服膺造次顚沛にも忘るべからざる所であつて、題目を唱へるにつけてもこの文を讀み、自我偈を讀むにつけてもこの御遺文を拜して行けば、全く活き〳〵したる信仰が起ると思ひます。それから

問うて云く人を以て善知識と爲すは當の習ひなり、法を以て知識と爲すの證ありや、答へて云く人を以て知識と爲すは常の習ひなり、然りと雖も末代に於ては眞の知識無ければ、法を以て知識と爲すに多くの證あり。摩訶止觀に云く、或は知識に從ひ或は經卷に從ひて上に說く所の一實の菩提を聞くと。（二五八）

これは經卷相承といふことを說かれたので、佛樣の思召を知らうと思へば眞實の法華經に依るべく、日蓮聖人の御趣旨を知らうと思へば御遺文に依らなければならぬ。口傳相承といふやうなことを言つて、一人別に何か特別のものを傳へたと言つても、それは信ずることは出來ない。慈覺、智證等は傳敎大師に日夕會ひたてまつつて居つたけれども、「法華經より眞言勝るる」といふ邪說に陷つた、日蓮は傳敎に後るゝこと四百年なれども、傳敎の眞意を發揚することが出來たと言つて居られるので、そんな事も日蓮主義者としてはつきり心得なければならぬことである。唯だ書いてある事をダラ〳〵讀んで居るばかりでは駄目ちや、日蓮主義は一人で私の議論を立つべきものではない、慈覺、智證が傳敎に會つて居つても傳敎の精神を留めて書いた『守護國界章』とか、『法華秀句』とか『顯戒論』といふやうな大事な書物には、何れも法華經を第一として佛敎を解釋して居る、それを知らずして法華經よりも眞言の大日經が勝れるといふやうなことを言ふに至つては、假令側で敎育を更けたと言つても信ずるに足らぬ。その通りで日蓮聖人のこの御遺文の中に現はれて居る『開目鈔』等の確實なる御書にある趣意に反するやうな事を、「別に相傳がある」などと言つても、それは何の値打も無いことである、その事が所謂「經卷相承」と言つて茲に出て居るのである。末代に於ては眞の善知識が無いから、法を以て師匠としなければならぬ、日蓮聖人の精神を知るには日蓮聖人に會つて、佐渡ヶ嶋で特別にお話を聞いて來たのだといふ事を今頃言ひ出しても、それは駄目なことで、日蓮の大事を留めるに就ては『開目鈔』その他の御遺文にちやんと書いてお置きになつたのであるから、今此處に日蓮聖人の直弟子日朗上人が出て來るとか、日興上人が出て來て「自分は別に聽いた事がある」などと言つても、それはあなた一人だけで聽いて置けば宜いやうな事で、それ程大事なことでないから日蓮聖人が書いて置かれないのである、大切な天下萬民に殘すべき事は、日蓮聖人は筆にせられぬといふことはない、それは日蓮聖人の御主張なるが故に、「私だけが別な事を知つて居る」と

いふやうな者は凶者である。それから

又云く若しこの法華經を受持し讀誦し正憶念し、修習し書寫することあらん者は、當に知るべしこの人は即ち釋迦牟尼佛を見るなり。佛の口より此の經典を聞くが如し、當に知るべしこの人は釋迦牟尼佛を供養するなりと。此の文を見るに法華經は釋迦牟尼佛なり、法華經を信せざる人の前には釋迦牟尼佛入滅を取り、此の經を信ずる者の前には、滅後たりと雖も佛の在世なり。（二五八）

法華經を讀むとか信ずるといふことは、釋尊の實在、釋尊の感應を信ずるのであるから、それ故に法華經を信じない人から見れば、釋迦如來は跋提河の邊で入滅してお歿れになつてしまつたと思ふけれども、法華經を信ずる上から見れば、それは方便の涅槃であつて、今も常住に吾等をお守り下さつて居る、この常住不滅の意識がはつきりしなければならぬのである。この意識を訓練するのである、さうとは思うてもその感じが鈍くなるから、朝に晩にお勤めをするといふのは、この實在の意識を益々培養して行くのである。それが爲にお自我偈を讀んで「我れ常に此に在つて滅せず」……成る程その通りだといふ風にして讀經をして行つてこそ價値がある、それを唯だ「自我得佛來」ジャブ〳〵と言つて、何の爲にやるか判らぬ、唯だジャブ〳〵やつたのでは何にもならぬ。今後は宗教の意識をモッと明かにして、さうして實在不滅の佛を憧憬れて、それに信念を捧げて行くやうでなければならぬ、それにはこの文が洵に明白な教訓である。法華經を信ずる者の爲には釋尊は今現に此處にお居でなされる、佛在世であるといふのであります。斯ういふ意味は日蓮門下は何れの教團でも徹底的に之を發揚し宣傳せんければ、世界的思想の闘ひには役立たぬやうになるだらうと思ふ、唯だ文字章句の末などをコッ〳〵やつて居つても駄目である、この宗教の根

本義に對して明白な觀念を持たなければならぬ。それから涅槃經を引かれて、

涅槃經に云く、若し衆生あつて財物に貪著せば、我れ當に財を施して然して後にこの大涅槃經を以て之を勸めて讀ましむべし。乃至先きに愛語を以て而して其の意に隨ひ、然して後に漸く當にこの大涅槃經を以て之を勸めて讀ましむべし。若し憍慢の者には我れ當に其れが爲に僕使となり其の意に隨應し、其れをして歡喜せしめ、然して後に復當に大涅槃を以て之を教導すべし。若し大乘經を誹謗する者あらば、當に勢力を以て之を摧き伏せしめ、既に摧伏し已つて然して後に勸めて大涅槃を讀ましむべし。若し大乘經を愛樂する者あらば、我れ躬から當に往いて恭敬し供養し尊重し讃歎すべし。（二六一）

この教を宣傳する爲にはいろ〳〵の方法を取れ、優しく言うて信ずる者の爲には愛語を以てし、又慢心を摧いて行かなければならぬ者の爲には之を摧き、種々樣々なる方法を取つてこの教を宣傳せよといふことが說いてある。この愉快なる宣傳の方式は、日蓮主義者がこれ亦能く考へて置かなければならぬ、如何にせばこの法華經の精神が發揚され普及するかといふことは、モッと〳〵本格に研究しなければならない、唯だ在來の事をその儘やつて居つて、それで事が足りるものではない、活きた人生、活きた文明は種々なる變動變化を生ずるのであるから、それに適應して教化を與へて行かなければならない、モッと眞面目に本格に研究すべき必要があらうと思ふ。又佛教信者もその通りで、唯だ在來の事をその儘といふ考へではいくまい、それは易らない大きな道もあるけれども、大いに變へて活躍せんならん事もあるので、そんな事も考へないで何時も唯だ同じやうな事を繰返して、お盆が來ればお墓に詣つて水を上げる、お會式が來

たら萬燈を擔いで太鼓を叩いて行けば濟むと思ふて居つてはいかん、モッと本格に改むべきものは改め、新たに開發すべきものは開發し、眞劍勝負で敬に努めれば、そこに本當の功德が出て來るのである、遊び半分や誤魔化し半分でやつたのでは功德といふものは出て來ない、モッと眞面目に日蓮主義者は醒めなければならぬ。それから

亦法華經を信せん愚者の爲には二種の信心を立つ、一には佛に就て信を立て、二には經に就て信を立つ。(二七〇)

法華經の信心の根據は、一つは佛樣に就ての根據、一つはお經に就ての根據である。佛は本佛に依るといふことが法華信仰の根據である、第二は一切經の中の眞實の法華經に依るといふことで、一つは佛に依つて信を立て、一つは經に依つて信を立てなければならぬのである。それは今の日蓮主義者は、佛に依つて信を立てるといふ事が判らない、お經に依るといふのも唯だ法華經は有難いといふことを鵜呑みに行くのであつて、それはモウ古い型である。この信仰の根據は第一は佛に就て信を立て、第二は經に就て信を立てるのであるから、佛の眞實を研究しお經の眞實を研究して進んで行く所に日蓮主義があると思ふ。この事は『聖訓要義』の一番始めに御紹介した『法經大綱鈔』の論式がこれと同じで、この點が第一に注意すべきことであります。どうしても法華宗の者は先づ第一に佛に就て信を立てるのであるから本佛を光顯しなければならぬのであります。

釋尊の大調和主義

此際宗門の大事を托されたる任重き宗務總監として、茲に施政の方針を提示す。

國友日斌

私は今度宗務總監に任ぜられました。男、生れて功名心もありますが、此際宗門の大事に渾身の至誠を捧げうる事、喜悅に堪えません。一言施政の方針を公けにします。

顯本宗團は、唯僧と寺とのみで支えらるべきものでない、一切の檀信徒の團結に荷負せねばならない、で、政見を「統一」誌に發表する次第であります。

四月十二日、京都妙滿寺の管長室に諮候しました、不肖日斌に宗務廳を組織せよ、疾く各部長の顏振を揃えて申出よとの大命を拜受しました。私は即答しました。「かくならんと豫期して一切は準備してあります、私は猊下がいつまでも管長であられる事を眞劍に熱望して居りますが、やはり猊下も人間に御生れになつたお方です、萬年の後、髮の毛ほどの微動でも、我顯本宗團に起つては相濟まぬと考へました。井村氏とは七年前、元の常德寺の古い庫裡で、一切を堅く約束しました。猊下からは昨夏札幌で色々と伺ひました。爾來苦心に苦心を重ねまして、遂に彼が如き見事の選擧を終りました、今後は更に萬善を期そうと心竊に誓つて居ります。

一切は釋迦牟尼の大調和主義でやります。狼と蛇と鼠と、それが一つの穴に棲んで、而も爭はない、そう釋迦牟尼は理想されました、なぜ人間は喧嘩するのですか、なぜ血を見る樣な爭鬪を續けるのですか。

宗門の大事と、任務の重いのに醒めた私は、一切

を超越して、眞の大調和主義に生きようと決心しました。人間、敵も無く、味方もなく、善もなく、惡もありません、凡ては悉く佛性を具して居ます、淪落の妖女耽溺の痴漢、尙親友の爲に裸かになつて之を救ひます。泥から蓮華の生ずる、あの淨い色、薫る香、それは本當の人間の心です。疑へば親と子、夫と婦、尙ほ殘された秘密があります、人間には絶對の信賴は出來ませぬ。が、又他の方面から考へると、一切衆生悉有佛生で、凡ての人皆善人であります。私は一切を超越し、釋迦牟尼の樣な大慈悲心を以て、至誠政を行はうと決心しました。内は一切歡喜あらしめ、光あらしめ、力あらしめ、外は宣傳の方式を更新して、簡明に、力ある、釋尊中心主義を以て、グン〳〵推し切らうと思ひます。そして國内の佛敎を統合し、東洋の民族を結束し、全世界の人類を濟はんとす、敢てナポレオンが不可能と云ふ言葉を否定したのを追隨するのでない、生命も、魂も一切を打込んで、佐渡日蓮上人に降りし本佛釋尊の靈感を、私の至誠において受けられぬ筈はないと確信して居るのです。

一切を犧牲にして來り援けんとする中川文學士、餞けにガンヂーの無抵抗主義を贈りて法務の大任を托せし武田文學士、細心冷靜にして膽力ある草切信榮氏、いつでも算盤を間違える大森氏に財政を托して而も一厘半錢の誤謬なきを確信し得る同氏の至誠。かくて新宗務廳は出來たのです。

一切屬他　則名爲苦。一切由己　自在安樂。
一切憍慢　勢極暴惡。質善之人　一切愛念。

釋尊の涅槃の垂訓、以て我等宗務廳員の座右の銘か、

一、担信徒の結束と宗門荷負の觀念の養成、
一、布敎機關の有機的組織、
一、敎育の大刷新、

その他布敎に社會事業に、門末寺院の整理隆昌に、新寺新敎會の建立に、本多猊下、井村管長御當閣の下に、我宗をして一天四海皆歸妙法の偉業を完成せしめんと期します。以て私の政見發表と致します。

名實共に完備したる

萬年インキ臺

この萬年盤は裏面の記載の如く化學の作用と自然を巧みに應用し製造されたものです。

永久にインキを要せず
盤面に凸凹を生せず
色彩鮮麗　耐久經濟
ゴム印の腐蝕絶無

鯱ハタ印 萬年臺

本品に依つて初めて萬年臺たる意義を全ふし價値を認むることが出來ます。
實地御試用をお奬めします。

同視せらるゝ勿れ

在來の萬年臺、萬年肉と稱するものとは全然その製造方法を異にしてゐます。

本品構造の解說

本品の内部構造は近代化學を巧みに利用したるものにして其内容は凝結せしめたる色素にゴム狀を呈したるものを按配し覆布に包み眞鍮製ニッケル鑛金枠を以て緊張したるものにして凝結色素の化學的作用に依つて、盤面に自然に大氣中の濕分を吸收しこの濕分と凝結色素とが自然に相合して盤中に於てインキが構成せられ毛細管に依つてインキの過不足を調節し使用度數の繁閑に準じて適度に盤面に潤出すべく最も合理的構造に成りしものなり。

要するに化學加工に成れるインキの素が盤内に仕込まれてあり、これが化學作用を起して大氣中の濕分を吸收し使用に準じて盤内に於て自然にインキが製造され盤面に出るのであります。

故は盤面は常に一定の濕潤と彩色の濃度を保ち、印面に均等に着色し終始一貫永久に鮮麗なる印影を得ることが出來申候。

特長

△冬期に乾燥せざること。
△夏期はインキの出過せざること。
△盤面に凸凹を生じざること。
△一日數千回乃至一萬回以上使用するもインキを塗る必要なきこと。

舟橋式萬年スタンプ案考案者　名古屋市中區白山町四五　船橋金藏

常樂院文庫の設立

國友日斌

尾州名古屋の東郊、風光絶佳なる城山の地に移轉されました常樂寺、それは不惜身命の行者常樂院日經上人に建立せられて、幾多尊い殉教の聖史を有する精舍なんです。

日經上人は關東から西に下りまして、その頃の都尾州清州に弘通し、尾州藩の武士歸依するもの多く、遂に慶長六年一字を建立しました。開基檀那となりましたのは上野、大津、淡河、小澤の四氏で、何れも二千石三千石を領した大身でした。それが常德寺（今の常樂寺）なんです。經師はそこに根據を置き、盛に四方に宣教しました、東は熱田から知多郡へ、西は美濃大垣へ、緒川の越境寺は常德寺の末頭、大垣の常隆寺も同じ末寺なんです。

遂に熱田の弘通に淨土念佛門徒と法戰を構へまして、慶長十三年の江戸法難、續いて百日の水牢、京都六條河原の刑場の極刑と相成つたのです。

そして常樂寺と稱すべきを常德寺と仮稱し、第八世日念上人の時、名古屋の小川町に移り、大檀那中村主膳の大本尊寄進（時價壹萬圓と稱す）と、德川侯の陰れたる庇護とに、（初代源敬公筆。紺紙金泥の法華經、其他一切の什寶悉く三ツ葵の紋章を印す）。……榮えに榮えつゝも、開基日經上人の立正安國の主張を公けに提唱し得ずして、幾百年を陰忍しましたが、遂に時は來ました。明治大正の聖代は何の憚慢なく我等の宣傳を許しました。且は時代の推移は常德寺境内二千坪をして、名古屋を東西に三里、南北に三里半、貫通する大道路の交叉點に接して横えました。時價實に百萬圓强。遂に大英斷は試みられました、常德寺は本來の名常樂寺に復して、東郊城山、景勝の地を相して堂々たる大伽藍は建立され、境内跡地には教化會館が釋迦牟尼の本當の思想に適ふ樣な、理想の大講堂として新建されました。

總經費拾八萬圓餘、檀頭豐田氏數萬圓を喜捨し、檀信徒悉く財を傾けて奉仕す。一切は芽出度完成しましたが、更に釋迦牟尼の聖語により、功德を自らも多く積み、他にも澤山勸めようと考へました。

常樂寺に澤山の寶物があります、經師筆本尊十數幅（法難の歴史を語る脇書あるもの、師弟六人の寄せ書、師第八人の畫像、經師の法友にして東西奔走の友に教材を供せし、姫路妙善寺の開基（本多貌下剃髪の地）日善上人の本尊、宗門唯一の珍寶たるべき存道日勇上人の本尊、尾州察の祖日宏上人の本尊、經師高弟日秀日顯日壽等の本尊、國寶に推賞されし兆殿司の大涅盤像（境内千數百坪を割き、天台宗の寶泉寺に與へて、報償として得たるもの、時價十萬圓）、其他蓮華糸を織りたる布に中興日念上人の本尊、唐畫、明畫、國畫、貴重なるもの百數十點に及ぶ。又古文書數百卷あり。更に全國の常樂院系寺院に檄して、或は嚴重なる保證の下に其什寶を保管し、或は精巧なる寫眞に之を模寫せんに、以て茲に完全なる常樂院文庫を得る事が出來ませうか。

地は中京東郊城山の淨境、所は常樂院弘教發祥の靈跡、集るは經師の心魂と血涙とを綴りし幾多の文書。かくて不惜身命殉教の行者、日蓮主義中興の偉聖日經上人の遺風を偲ばんに、末代の聖事何者か之に過ぎませうや。

茲に常樂院文庫を發願します。名古屋常樂寺は數年の苦闘に、漸く大事を敢行し力疲れました。暫時休養を要します。私は微財を集めて畜積しました信徒の布施若干をもつて居ます、他は佛祖の冥護を信頼しまして、今茲に此淨業を成就せんとします。大方同信の士女、必ず來つて常樂院文庫をお訪ね下さい。來つて此淨業に感謝せん時、其刹那に諸君の心中に起るこの淨業に寄進せんとの心持ち、之れ眞に清淨の喜捨であります。以て此聖業を援助して下さい、敢て大方に訴へます。

御斷り

佛教徒よ釋尊に歸れ

右手違ひにて印刷しませんでした。

あしからず御許し下さい。

統一編輯局

寄附

一金貳拾圓也　統一團本部へ

故一乘孩子爲七回忌追善

神奈川縣橘樹郡中原村神地

施主　西山喜太郎

信仰と疾病（其一）

醫學博士　石田誠

岡山三治郎

石田は十八歳の時肺結核症に罹り當時知名の醫師は絶對に不治症と宣告して見離し其當時結核を「肺癌」と云ふ誰れ一人として寄付く者なく萬窮して播州赤穗の濱で凡ゆる宗教や英雄豪傑の書籍を讀み盡し遂に日蓮の佐渡流罪を讀み病苦を超越し四ヶ年の後全癒し今は結核戰の撲滅者となる。岡山は入營中肺患に侵され偉大なる宗教の信仰によつて余の下に徹底的に自己結核を征服した一人である或日余等は近來有爲の青年結核患者の徒らに肺病教則等を讀み恐怖心のみを抱き信仰の疾病に及ぼす偉大なる力を無視し不治に終る者の多きを憂ひ余等は信仰の疾病に及ぼす實際的問題を研究すべく始めた處が石田は遂に病魔に襲はれ止むなく岡山のみによつて本編を掲載したるものである讀者乞之を諒せよ

古人は「人生は苦の海であり、涙の谷である」と嘆いた、まことに、人間は、生老病死の四大苦を背負ふてゐる、「病」は人生四大苦の一である。

人有四大。一大不調。百一病生。四大不調。同時俱作、

とは、今を去る三千年の古に大聖釋迦牟尼世尊が、五王經に獅子吼せられた御言葉である。

我々の身体は原子の集成であり、細胞の合成である、細胞が組織を形成し、組織が臓器を、臓器が集合して一の身体を形作して居る。細胞の病理的變化が疾病の原因である。

疾病の原因は、外因と内因とに別たれる、そして病氣の種類には、人体の組織に於ける病的異狀を器

質的疾病とし、學理的に器質的變化のないものを、官能的疾病と稱してゐる、此の外に、先天的に受けた、遺傳病と言ふのがある、此の遺傳病の中には其の病因を子孫に遺傳せずして素質のみを傳へるものがある、これを素質の遺傳と稱するのである。

健康体が疾病に罹るには必ず其の原因がある、而し病源があつても、必ず疾病に罹るとは限つて居ない、例へば一隊の兵士が同じ樣に暑中行軍をしても、日射病に罹る者と、罹らぬ者とがある、それは体質の如何に據るものであつて、外因と內因とが一致しなければ疾病は惹起するものではない。肺炎球菌は健康な人の呼吸器中にも少數ゐるが、病氣は發しない、たま〳〵寒さに遭遇して呼吸器を損傷すると、急かに肺炎球菌は活動を始める、そして、肺炎といふ一つの疾病を起す、すると喰儘作用で血液中の白血珠が、病源菌である肺炎球菌を食ふ、そして、とう〳〵敵を征服して了ふ、これが自然的の治癒である。

亦、人体には自衛上、種々な分泌作用や、抗毒素があつて、常に外因に對抗する機能が自然的に具備せられて居る。

病氣とは「氣を病む」とも言つて、古來から精神力で疾病惹起の原因をなすとなされて居る、まことに肉体と精神とは密接なる關係を有し、精神作用が肉体の上に種々な生理的現象を發現することは否定することの出來ぬ事實である、羞恥の場合に赤面し、恐怖の時に顏色を失ひ、悲哀憂愁の時には食思不進を來す等其例は甚だ多い、今、精神作用が肉体に及ぼす卑近な例を表すならば

消化器　消化器能の活潑と否とは精神作用に依るものであつて、愉快な時は粗食もうまく、梅を想像すれば唾液が出で、悲哀の念ある時は大牢の珍味も美味と感じない。

呼吸器　愉快の時は呼吸も靜穩であるが、立腹すると呼吸が激しくなる。

循環器　恐怖心があると心悸が興進する。

視覺　恐ろしく想ふ時は尾形が幽靈に見え、案山子が妖怪に見える。

聽覺　失意の時には松吹く風が哀調をおびて聞え、得意の時には天來の交歡樂と聞える。

臭覺　不快の時には妙香も感せず、慈愛の念があれば子供の糞尿も臭く感じない。

觸覺　一心になれば寒中の水行も寒く感せず、一生懸命になつて居る時は、負傷しても知らない。

神經系統　非常の時には、平生、迚も持てない重い荷物も易々と持つことが出來、吃驚すると腰が立たなくなる。

傳染病　精神力が强ければ、身体の抵抗力が强まるから傳染しないが、反對に精神が薄弱であると傳染し易い。

上述の如く精神的作用が生理的作用に影響を與ふるが故に精神的作用に因つて病氣を惹起する原因にもなれば、亦、且疾病を輕快せしむることにもなるのである。「素問」にも

心氣即百病生。　心靜面萬病息

とあつて、洵に氣から病を生ずると言ふことは一つの眞理である、從つて「我病めり」との觀念を抱く時は肉体の上にも異狀を來すことがある、精神と肉体とは常に不二不離の關係を有してゐる、而して其の精神作用が疾病惹起の內因となることが屢々ある、激烈な精神感動、例へば、憂苦、憤怒、驚愕、熱狂、等は腦髓血管の破綻を來たし、又、興奮、苦慮のために慢性の器質的疾患を招くことがある。

精神の作用に依つて身体の生理的現象に變化を來さしむることに就いて詳細なる研究をした、ハンモンド博士は「患者の七十五%は自己の精神作用で自己の病氣を惹起するものである」と言つてゐる、そ

して博士は其等患者は、且、精神作用で其疾病を全治することが出來ると說いてゐる、恐るべく、且、注意すべきは精神作用である。

成る病人が「自分の病氣は輕い」といふ强固な觀念を常に持續するならば、其れが事實、重患であつても、輕快現象を呈し、又「自分の病氣は重い」といふ觀念があれば事實上、輕症な病人も重態に陷るのは時々見る所の實例である。

精神作用が肉体に影響する實例として屢々引用せらるゝ事實がある、昔て佛國の一貴族が死刑執行を受くるに際し、醫師は貴族に對し「貴下の頸動脈を切斷し、全身の血液を絞りて死せしむべし、出血二千グラムに達すれば貴下は絕命するに至るべし」と宣告し、外科用器具を陳列し、白布を以て四人の眼を覆ひて柱に縛し、主任の醫師は嚴かに「頸動脈を切斷せよ」と命ず。助手は、ひそかに小針にて四人の首のほとりを輕くついて頸動脈を切斷したるが如く思はしめ、豫てひそかに準備せし、ゴム管より微溫湯を滴らせた、然るに四人は眼を覆はれてゐるため、首筋をつたふ微溫湯を、切斷せられた頸動脈から流れ出づる血液と確信してゐるので、次第に氣力は衰へ、やがて、「二千グラム」と呼んだ醫師の聲をきくや、遂に落命したといふことである。精神作用が肉体に及ぼす影響は斯くまで極端に烈しいものである。又蕎麥を食つて偶然に下痢した人が其后、蕎麥を食ふ毎に必ず下痢する人となつた。亦想像姙娠といふことがある、即ち婦人が「自分は確かに姙娠してゐる」と豫想する結果、實際、姙娠と同一の兆候を現はし、月經は閉止し、惡阻も發する等、姙娠の生理的現象を一時來すが如き、皆、精神作用に原因する處の肉体的變化である。

人体の活動は交感神經と運動神經の二大系統に依つて支配せられて居る、交感神經は大生命の活力を、人体の各細胞及び器管に達ふものであつて、血液の循環、消化作用、呼吸作用、等其他諸種の不隨意活動はすべて交感神經の掌る處である。然らば交感神經は何に依つて活動を續けてゐるかと言ふと、それは宇宙の大生命に據るものであると信ずる。

人体には自然的に疾病に對抗し、又此れを自然に防止し、更に、是れに打ち勝つべき自然的機能を具備する外、人間の精神は肉体を訓練してゆく「力」を持つて居るのである、此の「力」を日常生活の上に活用して身体の健康を增進し、且疾病を治癒せしめてゆかねばならない。然らば其の「力」とは何ぞと言ふに即ち宇宙の大生命である、此の宇宙の大生命は、仰げば彌々高く、斬れば彌々堅く、大には方所を絕し、細には無間に入る。能く萬象を統理し、縱には三世を極め、橫には十方に亘る。所として在らざるなく、緣として應せざるなく、實に言亡絕慮、不可稱、不可說、不可思議の實在である、老子は假りに大道とし、孟子は假りに浩然の氣と稱し、孔子は之れを天と言ひ、宋儒は之を太極と言つた、キリストは獨一眞神と稱し、波羅門は之れを梵天とし、西哲は此れを自然の理とし、釋尊は此れを一心と說かせられた。

眼淨土眞實信文類三には

大信心は、すなはちこれ長生不死の神方と明示してある、即ち吾等は宇宙の大精神と合一する處の六合にあまねき、金剛不壞の信心に據つて生老病死の四苦を解脫し、涅槃の證果を獲得するのである、此の宇宙の大生命に融合する大信心を肉体の上に活動せしめ、疾病の必ずしも恐怖すべきものにあらざることを理解することは、日常健康の增進にも著しき良果あるは勿論、疾病に罹つた際は更に顯著な力となるものである。

近代醫學の進步は迅速であるが、而し其一大弊は唯物主義に囚はれて、精神界、即ち唯心的方面の研究を閑却して居ることである、精神的療法は醫師に

於て當然行ふべきことである、患者の精神狀態が、如何に醫療上に影響するかは深く注意すべき點であつて、「信頼すべき醫師である」といふ患者の信念があれば、其の醫師の容貌に接し、其の聲咳を聞いたゞけで、病は輕快するといふ事實がある、故に醫師は唯物主義に走らず形而上の學理を研究し、患者に對して、永遠の生命を敎へ、靈肉一致の慰安と救濟を與へ、安心立命、不動無限の信念を得しめてこそ、眞實に醫が仁術としての大任は完成せらるゝのであると吾人は信ずるのである。

疾病の原因を精神的方面から考察するに、迷睡なる潛在意識が如何に疾病を發生せしめ且助長して居るかと言ふ事に愕然するのである。泉水の方位が惡かつたとて、胃腸病を發したり、先妻の年忌であると言つて高熱に苦んだり、生靈につかれて居ると言つて神經衰弱に罹つたり、其他、金神、水神、鬼門、等の祟りとか、年齢、方位、等とか言つて精神的に疾病を惹起し、且助長して居る無智な迷信家があるのは甚だ笑止である。

疾病の大部分は恐怖心から發すると言ふも決して過言ではない、斯くの如き正當の理由なき恐怖心は、所謂、强迫觀念であり、又一種の變態心理である、然も是等の迷信的恐怖心に就いて憂慮すべきは、病氣其物はさまで怖るべき必要のないにも拘らず、患者が非常に恐怖して遂には取返しのつかない結果を來すことがある。病を恐れ、又恐れるのを恐れる樣になつて來ると、終には當然・治癒すべき病氣を、自ら治癒しない樣な悲劇を生ずるに至るのである。少し下痢して赤痢ではないかと心配したり、少しの咳嗽を肺結核ではないかと心配する、流行性の疾病は之を恐怖する者に感染し易い、それは其人の抵抗力が、恐怖心に依つて著しく弱められるからである、「自分は健康だ、たとへ若し病氣になることがあつても、直に快癒する」との强い〳〵確信を持つてゐる人は、實實に於て强健である、若し病氣になる樣なことがあつても、早く輕快になり全治する。げに、肉体の强健は先づ精神の强健に其の基礎を確立せねばならない。精神修養を積んだ人の觀念力は强固である、從つて斯る人は堪ゆべからざる病氣にも平然として耐える、そして其の回復も又迅速である、觀念力の如何で病氣にもなれば、病氣を治しもするのである、健全なる精神は健全なる身体に宿るものであるから吾人は常に肉体に對する惡觀念を折伏して、健康な正しき信仰に依る觀念を持續せねばならない。

法華經に

今、此の三界は　皆是れ我有なり、其中の衆生は
皆是れ吾が子なり。

と、吾人は迷へる羊ではなく、御佛の一人子である。吾人は、是當成佛である、佛の根本智に疾病は無いのである、病氣の有ると言ふのは有漏の後得智であつて、根本智とは一切の煩惱を解脫した「我心似秋月、碧潭清皎潔」で此の心には病氣の蔭るのが當然である。

超世の悲願さゝしより
われらは生死の凡夫かは
有漏の穢身はかはらねど
こゝろは淨土にあそぶなり

で、煩惱即菩提、生死即涅槃、吾人は廓然として、全く、佛の慈光に包まれるのであつて何等の苦痛も存在しないのである。此の信仰生活に於ける唱題の功德を「初心成佛鈔」には

一切衆生の心中の佛法を唯一音に喚び顯し奉る、功德無量無邊なり、我が己心の佛性、南無妙法蓮華經と、よびよばれて顯れたまふ所を、佛とは言ふなり。

と、又「四信五品鈔」

妙法の義理を知らざる人も唯だ、南無妙法蓮華經と、唱ふるに、功德を具することは恰も小兒

の乳を含むに其味を知らざれども自然と身を養ふ、耆婆、妙藥、誰れか辨へて之を服せん。水、心無けれども火を消し、火、心無けれども物を燒く。

と、既に悉く萬物吾人に具はり、天地の妙用は吾人の胸底に光るのである。若し此の眞理を徹見し、此の境地に悟入したならば、即身成佛、何處に疾病が存在するであらうか？、茲に至つて始めて生老病死の四大苦を絶し、苦樂を超越して、佛凡一体の眞我を證得し、無上涅槃の極地に悟入するのである。

無明實性即佛性。　幻化空身即法身。
法身覺了無一物。　本源自性天眞佛。

既に吾人の一言一行は佛作佛行であり、吾人と宇宙の大道とは一体不離となるのである。

華嚴經に

心性周遍し、虚徹靈通す、之れを散ずれば萬事に應じ、之れを收むれば一念となる。

で吾人の精神界には、此の宇宙精神と合致する靈妙なものがあるのであつて、此れを發揮してゆくのが信仰の生活である。吾人は一つの小天地であり、我は一つの小宇宙である、彼の大天地大宇宙と離るゝことなく、其の妙用を發揮する處に娑婆即寂光の妙土がある、其の妙境には生老病死の苦惱あることなく、無限絶對の淨土が莊嚴せられて居る、此の理想の境地は、遠く十萬億佛の刹土を過ぎた西方にあるのではなく、一唱、南無妙法蓮華經と稱する時、無上甚深の功德に依りて其の心中に顯現するのである。

大聖釋迦牟尼世尊が、寂滅道場に於て、大乘の法を說き、四方に遊說して敎化を施すこと五十年、蓋世の識を以て諸哲學を論破し、沙羅双樹の下に寂然として涅槃に入らせらるまでの敎門は、すべて八萬四千である。然し、四十餘年未顯眞實。いよ〳〵其の本心を明かし、如來所以興出世は、實に佛敎精華の萃るところは唯一の大乘、敎理幽玄微妙なる妙法蓮華經である。佛敎の極致、佛陀の選擇本願、宇宙の大生命は此の法華經の外にないのである。

吾人は此の妙法蓮華經の信仰に依つて、即身成佛、生死即涅槃、

善惡不二の南無妙法蓮華經なれば、惡人も成佛す、邪正一如の南無妙法蓮華經なれば、邪見もいよ〳〵憑みあり、皆佛道の南無妙法蓮華經なれば、二生三生を期すべからず、唯だこれ一生入妙覺の大法なり。

と「萬法一妙鈔」に示してある、あらゆる有爲の世界を超越し、絶對の信仰に住して、吾人は、永遠に生きぬくと俱に、健病不二の妙諦を悟得し、無量無邊の功德を具し、寂光の淨土を顯し、即身成佛、一唱に依つて涅槃の妙果に證入するのである。

（文責在岡山）

大僧正
本多日生師著

本尊論

目次
一、緒言……二、宗敎と本尊……三、諸種の本尊觀……四、本尊と眞理……五、本尊と倫理……六、本尊と救濟……七、佛敎の本尊觀……八、佛敎の三寶觀……九、佛身觀の要旨……一〇、滅後信仰の厳觀……一一、佛敎本尊の勸請文……一二、法華經の實例……一三、遺文に顯はれたる本尊……一四、本尊の勸請文……一五、本尊勸請の實例……一六、遺文の會通……一七、異論の解決……一八結論

定價　布製一部　金七十錢　送料金四錢
（紙製は品切れ）

發行所　立正結社
名古屋東區田代町常樂寺內

賣捌所　統一編輯局
振替名古屋一〇八一番

童話

籠の目白

長谷川義一

ある日曜日、太郎さんと、花子さんと兄妹は、朝から仲よく近くのお山にお遊びに出かけました。二人は、木の實を取つたり、綺麗な草花を集めて遊びました。

お腹になつたので、用意してきたお弁當を食べてをりますと、ピーヽと鳥の聲が、近くから聞へました。

『兄ちやん、鳥の聲が聞へるよ』

『お山だもの鳥は、いくらでもをるさ』

『けれども、大變近くにをるやうだわ』

花子さんは、お弁當を食べるのを止めて、あちらこちらを探してみると、大きな樹の下の草叢に、一羽の鳥の子が居りました。

『兄ちやん、鳥の子が居るんだよ』

太郎さんは、パンを口に、はふばりながら飛んで來て

『やあ、可愛いなヽヽ』

『可哀相れ、一人ぼつちで、お家へもつていつて、飼つてやりませうよ』

『さう仕樣よ』

花子さんは、枯草を寄せ集めて、巣のやうなものを造へて、子鳥を入れて、大事にして二人共、お山から歸りました。

お家の門口に來ると太郎さんは

『お父さん、只今』

お父さんや、お母さんは、二人があんまり早く、お山から歸つて來たので、不思議に思ひました。

『お父さん、今日お山で、私、可愛い鳥の子をひろつてきたのよ』

花子さんは、寶物でも持てるやうな手つきで、お父さんの目の前に差し出しました、お母さんは、のぞいて見て

『おゝヽ、なんて可愛い子だらうこと、なんといふ鳥でせう』

『これは、目白だよ』

『どうりで、目の周が、白いと思つたよ』

と太郎さんが云ふと花子さんは

『お父さん、目白を入れる大きな、そうして綺麗な籠を、買つて頂戴よ』

それから、小鳥屋に行つて、籠を買つてきました、二人は、朝と夕方は、いつでも、お味しい餌をやりました。

はじめの内は、目白も子供でありましたから、籠の隅つこの方に、小さくなつてをりましたが、段々、大きくなりますと、毎日、良い聲で鳴いてをります。さうして坊ちやんとお嬢ちやんには、一番よく馴れてをります。

二人は、朝、學校に行く前には、きつと、餌をもつていつて、さうして遊んでから

『目白さん、これから、學校に行つて參りますから、おとなしく、待つていらつしやい』

と云つて出かけます。目白は、籠の中で、早く、坊ちやんや、お嬢ちやんが、學校から歸つてくるのを待つて居ります。

『私は、本當に嬉しいわ、こんなに大きな、そうして、綺麗な籠に這入つて、いつもヽヽお味しいものを頂だいて、また、優しい坊ちんや、お嬢ちやんが、お友達になつてくれますもの、なほさら、嬉しい、樂しいわ』

と目白は言つて居りました。

あるお天氣の快い日、目白は、面白相に、さへずつてをりますと

『目白さんヽヽ』

『おや、誰がが、呼んでるよ』

『目白さんヽヽ』

『あなたは、どなた』

『私は、千舌よ、あなたは、籠の中に這入つて居つても面白いの』

『えゝ、面白いわ、お味しい食物や、さうして、この家の坊ちやんや、お嬢ちやんが、可愛がつて下さるんですもの』

『けれども、籠の中では、せまくつて仕樣がないでせう、外へ出て御覽なさい、それはヽヽ廣くて、さうして、面白い處が澤山あるよ、目白さん、外へ出なさい』

目白は小供の時から、籠の中に居りますから、野原や、森や、お山のことなどは、少しも知りません、なんとなく、籠の外へ出たくなりました。

『それぢや、千舌さん、今日は、もう坊ちやん達が、學校から歸つてきますから駄目よ、明日、坊ちやまの居ない時に來て、私を、外へ連れて行つてれ』

『わけありませんよ、外は大變に面白いよ』

『それでは、明日は、お願ひしてよ』

『あゝ、いゝとも、左樣なら』

千舌は、森の方へ飛んで行きました。

翌日になると、目白は、外のことばかりを考へてをりますと

『目白さんヽヽ、連れに來ましたよ』

『隨分、早いんだね』

千舌は、籠の戸を明けました。

『さあ、早く、一緒に參りませう』

と千舌について、森の方に行くと、そこには、澤山の千舌が、枝に止つてをりまして、目白を見ると、目白さんヽヽと云つて、喜んで迎へてくれました。

『さあ、目白さん、これから、遠の方に遊びに行きませうよ、皆についていらつしやい』

と多くの千舌について、はじめは、嬉しまされに元氣を出して、飛んでをりましたが、今までは、籠の中で、少しばかり飛んでるのですから、段々疲れて、千舌とは、隨分離れてしまひました。

『千舌さんヽヽ、待つてよ』

『目白さんヽヽ、早く、お出でよ』

次第ヽヽに彼は遠くなりました、目白は、

到々、千舌を見失ひました。

その内に目白は、羽根は疲れ、息は苦しくなり、目がくらんで、空から落ちてしまひました。

『あゝ、痛い、足をくぢいてしまつた、困つたなあ』

目白は、足や、肩を撫りながら

『一体、こゝは、何處でせう、お山には、怖ろしい獣物が居る、あゝ、怖い、私は、千舌さんの云ふことばかり聞いてしまつたから、こんなことになつたのだ』

と今更悔んでも、駄目でありました、樹の上の鳥が、カア〳〵と鳴いてをつても、目白には、アホカ〳〵と聞へて、馬鹿にされてをるやうに思はれます。森の向ふの山寺の方から

夕焼け小焼で日が暮れて
山のお寺の鐘が鳴る
お手てつないで皆歸れ
鳥と一緒に歸りませう

と子供達の歌が、かすかに聞へます。

『あゝ、もう、直に夕方だ、淋しいなあ、私は坊ちやまや、嬢ちやまが、大事に育てゝ下さつた、御恩を忘れたから、ばちが當つたのだ、これから、身体はきかなくても、坊ちやまの處に、どうしても歸つて、お詫を申しませう』

と元氣を出して、歸らうと飛び出しました。

太郎さんと、花子さんは、學校から歸つてみると、目白は籠の中には居りません、家中は大騒ぎであります、花子さんは、悲しくて泣いてしまひました。

太郎さんは、朝夕、お父さんが、佛壇の前に座つて、燈火をあげて、佛様にお祈りするのを見てをります。たゞ、目白が居ないので、厭いて居つても仕方がありません、それには、佛様の御力をかりやうと思ひまして

『花ちやん、泣かないでお出で』

と一緒に、佛壇の前で

『どうか、佛様、可愛い目白さんが、もどつてくるやうに、お助けを願ひます』

と紅葉のやうな手を合せて、二人は、一生懸命にお祈りを致しました。暫たつと、バタ〳〵〳〵

『あら、なんの音だらう、目白さんが歸つて來たのかしら』

と太郎さんは、籠のある處に走つて行きました。

『歸つた〳〵、お父さん、お母さん、目白は歸つたよ』

目白は歸つて來たものの、あまり疲れたために、到々、死んでしまひました。

太郎さんと花子さんは、可愛い目白の亡骸を、お庭の隅に埋めて、小さな石を建て、前に美しいお花を植へてやりました。

（たにり）

四月號の地獄にて四十三頁の上段十一行目の『針』は『計り』の誤字ですから訂正して置きます

欣快

國友日斌

大名古屋市に產るべくして生れなかつた宗教のホール、教化の殿堂を建設したい念願は、僕の心に熾烈な勢で燃えてゐた。そして遂に僕の念願は達せられて教化會館は建設せられた。而も、僕の手でそれが生れたといふ事は欣快合掌を禁ぜざるを得ない。

×

一斤のパンを圍繞して多くの人々が血を賭して爭鬪してゐる。爭鬪する人々と云ひ、怒號する人間といひ、果してそれが人間本來の姿かと考へて見る。人間爭鬪は疑ふべくもない事實ではあるが、人間本來の姿かと思考する時、爭鬪に在る人間は本來の姿でないと否定する。

大聖釋迦牟尼世尊は大調和主義を說いた。狼と、鼠と、蛇と小さい一つ穴に棲んで尙ほ平和に生き得てゐると慈訓を垂れた。

世尊の大調和主義！僕は此の双手に精神をこめてこの教化會館に據り、一切の人たちに歡喜と光明と力とをあらしむるべく教化會館を働かせやうと思ふ。

×

僕はこの教化會館一つを生む爲に、ずいぶん苦しい働き續けて來た。然し僕は涅槃經にある、

「一切屬他則名爲苦、一切由己自在安樂、一切矯慢勢極暴惡、賢善之人一切愛念」

の言葉を誦しつゝ忍從と努力を續けて來た。一切愛念を抱きつ働いて來たのが今この會館建設に依つて總ては報ひられたのだと考へる。賢善之人か否やは他人が見てくれる處だが、尠くとも自分はそれに近づきたいと思つてゐることは遠慮なくいひたい。

×

僕は蓮華を愛する。で、これを教化會館内に掲げた、僕の蓮華を愛する心のシンボルとしてだ。濁泥に生ずる蓮華の清淨な華を開き馥郁の香を放ち聳然としてゐる樣はいつも僕の心をうつ、蓮華に泥水をかくれば敢然として彈く。その清淨さと勇氣とは、最も僕の氣をひくのだ僕の蓮華を愛するの心は僕の蓮華の如く清淨さと、勇氣とがありたいといふ心の謂だ。

會館内に掲げたステンドグラスの蓮華は、向後見る度毎に僕の心を刺戟し、僕の同志をして何ものかを感せしめずには置かぬだらうと思つてゐる。

× 一切の濁流を入れて而も屍を止めず、絶對に清淨なる大海の心、それが信仰ではないだらうか、廣い心で尙德し、なほ仁愛義俠の道を崇めるのは東洋民族精神の一大美點であり、われら本來の姿ではなからうか。

僕は、この教化會館一つを抱いて而も人類の平和を實現せんとした大聖釋尊の教旨に依つて、僕の會館を働かせやうと思つてゐる。

僕のこの自負を誇大なりと哂笑するか否かは他の自由であるし、僕それ自身が、この大きな自負を抱きつ働きたいと念願することも亦自由である。僕と、そしてこの教化會館は今や大自然に與へられたまゝの力で働かうとしてゐるのである。

大僧正 本多日生師著

一切の勝利は人格にあり

——名古屋放送局の講演——

【第三十五版】發行

一部 金五錢 送料金貳錢
十部 金三十五錢 (送料共)
百部 金參圓 (送料共)

名古屋市東區田代町城山

發行 統一編輯局

振替名古屋一〇八一九

記事

名古屋常樂寺教化會館

開館式と講演會

十日には大法要

苦闘數年、十八萬の巨費を費したる名古屋の教化會館と常樂寺の移轉中興は完成した、その落成式の狀況を新愛知、名古屋兩新聞の記事から轉載する。

名古屋市中區新榮町四ノ元常德寺跡に社會教化運動を目的として教化會館なる大ホールが建設されたことは既報の通りだが九日午後六時より開館式及び記念大講演會を行ひ十日東區田代町城山常樂寺で堂宇移轉と教化會館落成の大法要を厳修することになつた、九日の講演は左の諸氏の講演がある

「社會教化に就て」本多日生大僧正、「東西兩洋の文明」佐藤鐵太郎中將、「賢善の人一切愛念」井村日成新警長、「教化の理想と宗教の使命」加藤鳴堂氏、「解脫の道」中川日史文學士、「邦家の現狀」武田顯龍文學士で、右について會館長岡友日斌氏は語る「會館建設の意義は御紙に既に紹介して頂いたが、いよいよ開館式を行ふことになりました、開館式は從來のやうな形式や虛飾をやめてほんとうに社會教化運動の第一歩だといふ意氣でやるつもりです、祝辭や祝電は遠慮しました、これからは釋尊の說いた大調和主義にもとづいて社會教化運動の歩を進めたいと思つてゐます」云々

（名古屋新聞轉載）

九日夜教化會館の開館式と講演會

聽衆千八百餘名の盛會

（新愛知新聞より轉載）

既報の名古屋市中區新榮町四元常德寺跡に建設されたる教化會館開館式は九日午後七時より館主岡友日斌師の「開館の挨拶」に依つて始つた開館式は未だその例を見ない變つたもので館主岡友師の五分間に亘る「會館建設の歷史と意義」に就て說明があつただけで式は終り直に記念大講演會に移つた

先づ文學士武田顯龍師登壇し「邦家の現狀と」題し邦家の現狀の思想界に物質界に混渾としてゐるを嘆いて今後の生活意識の目標を示した續て顯本法蓮華宗新管長井村日成師は「賢善之人一切愛念」の涅槃經の一節を講題として縷々三十分に亘つて佛の廣大なる慈悲を說得した引續き東大教授加藤鳴堂氏の「教化の理想と宗教の使命」海軍中將佐藤鐵太郎氏の「東西兩洋の文明」大僧正本多日生師の「社會教化に就て」

の講演があつて九時散會したが來聽者は本の香の新しい新ホールに約一千八百餘名詰つて頗る盛會を極めた。

常樂寺移轉中興大法要

開基日經上人以來、誤れる官憲に壓迫せられて、殆ど三百幾十年、明治大正の聖代は我が常樂寺の榮譽を蘇らしめたり。大名古屋の東郊城山の絕頂、堂宇堂々として天空を聳す。東海第一の本山、類本無二の大道場なり。

その移轉中興の大法要は四月十日を以て擧行されんとす。來集するもの管長鈴木、井村台下、笠川台下を初めとし、東北は北海道より西は山陽の果て北は北陸山陰より、百數十名に達し、參詣者は十間の本堂に溢れたり。天童の數二百、雅樂の聲九天に徹し、大導師の慶讃文は音吐朗々として參詣者の肺腑に徹す。

佛祖冥の盛典に感激し給ふか、朝來曇々として降りしきりし降雨は、法要に先つ兩三時間、さらりと晴れて、境內外の櫻花滿開、靈山淨土もかくやと思はるる。將來數百萬の生靈に惠れる常樂精舍に濟れなんか。

されば我等が居住して一乘を修行せん處は何れの處にても候へ常寂光の都たるへし我等が弟子檀那とならん人は一歩をゆかずして天竺の靈鷲山を見、本有の寂光土へ晝夜に往詣し給はん事うれしとも申す計りなし。

祝電祝辭の數百數十、謹で茲に感謝す。(日筧)

慶讃文

謹而奉勸請本門壽量本尊別而末法の大導師宗祖日蓮大聖人等委知顯覺玄に春風駘蕩百花爛漫たるの好期寶珠山常樂寺移轉竣工し恭しく開堂供養の式典を擧ぐ

抑々常樂寺は慶長六年常樂院日經上人の創立する所爾來星霜を閱する事三百有餘年、大正十一年五月現法統國友日斌本堂及墓地を市內東區田代町城山の淨地に移轉し官有私有土地併せて二千餘坪を大藏省に無償譲與を申請し其恩典に浴し爾來各方面の教化事業、社會事業の研究調査を繼續したりしが先づ第一事業として教化會館を設立することゝなり經費十五萬圓を以て大正十四年九月舊地に敷地約二百二十坪を以て建築を起工し漸く其竣工を見四月九日盛大なる開館式を擧行したり會館に我國体の精華と大聖釋尊の教旨に準據し正義と仁慈を以て人類に歡喜と光明と活力あらしむべく諸般の施設を行ひ東洋民族を結束し進んで全世界の人類に眞の平和を實現すべく爾後毎月宗教講演會、民衆教化講演會、少年少女會其他社會事業、音樂會、演藝万至映畫の會合にも利用せんとす

願みるに慶長年間刑の刑に處せられ迫害多經の中にも身輕法重死身弘法の金言に叶ふとの悅を勝いて活躍せられたる開基日經上人の創建せられたる常樂寺も今常樂寺と改稱し大正聖代に於て佛祖の加護と現住日斌の奮勵努力に依つて今日の盛擧を見るを得たり眞に慶すべき也

仰ぎ願くは佛陀三寶哀愍納受あらせ玉へ伏而乞正法興隆皇道繁榮國運隆昌萬民快樂法輪常轉山門繁榮寺檀和合ならしめ玉へ仍而慶讃文如件

大正十五年四月十日

顯本法華宗管長大僧正聖應院日生

稽首

各地教信

京都三月布教 一日夜開蹟會後青年會講演「蓮祖四大檀越と其信仰」土持真達師「御遺文講義」原田日勇師△二日夜護正會例會を本山講堂にて「佛教大綱」原田日勇師△八日午後塔中成就院にて護正婦人會例會「婦人美」有田宏道師△九日午後塔中正行院にて正行婦人會例會「佛身觀」萩原日道師△十三日午後本山にて宗祖會殿修後講演「日蓮主義と覺醒」有田宏道師△同日夜本山にて青年會例會「月輪浮觀」原田日勇師△十六日午後法光院にて妙光婦人會例會「教生とは何ぞや」叡田通泰師△「現代思潮と日蓮主義」伊藤寛道師「醉生夢死と向上生活」土持真達師「法花傳に顯れたる人相」原田日勇師△十八日午後彼岸初日法要嚴修後講演「實在の信仰」有田宏道師△二十日塔中大慈院に於て彼岸法要修行後說教「人生々活と向上生活」土持真達師△同日夜本山にて青年宗教部講演「御書講義」原田日勇師△廿一日於本山彼岸中日法要嚴修後講演「道孝の意義」原田日勇師△廿三日午後四時より管長本多猊下の御講義「法華要文講義」本多日生猊下同日午後七時より本山講堂に於て例會「開會の辭」原田日勇師「佛教より觀たる常識」本多日生猊下「開會の辭」金光孝碩師△廿四日彼岸結日法要說教「法花信仰の力」三好信道師△廿八日午後本山にて開山會修行後講演「居は氣を轉す」金光孝碩師。

京洛布教通信 △二月八日本正寺二樂會「無疑曰信」有田宏道「淡行を慕ふ者」陸軍少將細野閣下△十日本正寺婦人會「題目と佛陀との關係」金光孝碩△三月八日本正寺二樂會「宗教の一考察」土持真達「常住の快樂」原田部長△十九日本正寺彼岸會「信仰と修養」叡田通泰△三月廿四日鄰山町常光寺彼岸會「處は人を感化す」金光布教師。

金澤教報 △二月八日午後七時釜屋本成寺に於て「幸福への道」△十五日午後二時金澤本覺寺に於て「日蓮上人の信仰」△同日午後七時千年町檜垣氏宅にて「幸福への道」△二十二日午後二時本長寺に於て「佛陀の女子に對する同情(其三)」△廿六日午後七時天晴會例會「東西の文明と日蓮主義」△廿八日午後二時本多町本行寺に於て「法義聽聞の心得」△同日午後七時より本多町河合氏宅にて「身の實より心の實」。以上能仁一十師出講。

高岡信行學會講演會 △二月廿日午後七時妙國寺に於て畠山友次郎氏「日蓮上人の溫情」昇塚本勇師「唱題成佛」聽衆八十名△廿八日婦人會開催畠山友次郎氏「日蓮上人の婦人觀」昇塚本勇師「法華經の婦人觀」聽衆七十名△三月十八日より彼岸大講演會を開き畠山友次郎氏に一週間の連日講演を試みられ眼れる宗教家に大なる刺戟を與へし事と思ふ。其日割と演題と左に記す△十八日「誠信と積德」△十九日「衣座室」△廿日「法恩鈔の概念の一」△廿一日「法恩鈔の概念の二」△廿二日「藥草喩品の大意」△廿三日「菩薩行の實行」聽衆少なき日は七十名多き日は二百名なりき。畠山友次郎氏の熱烈に感激して商人に身はありながら日蓮の教を說くに日を惜しまざり (古谷孫右衛門生)

釋迦如來降誕の日に詠める歌三首

古谷孫右衛門

釋迦如來產れ給ひしよき日にて甘茶の匂ひ一

日すなり
甘茶呑む年一トたびの今日なりぬ釋迦牟尼佛の世に出でし日なり
釋迦牟尼のひかり尊くあがむ身の甘茶作りて子もいたゞきぬ

千葉縣濕津教報 星野純義師は今回農村青年指導の目的を以て立正青年會を組織しその第一回の試みとして下野本泰寺に於て左記の通り一週間夜間講習會を開催せり講師は星野會長岡澤校長にして科外講師として笠原信耳鍋澤純貞の兩師も出席せられたりと。

第一回青年講習會講題
（自三月八日至三月十四日）

△八日「開會の挨拶」午后六時半より△「日本建國史（歴史）」同七時より△「手紙を作る心得（國語）」同八時より△九日「國民精神詔書講解（修身）」△「我國の思想史（歴史）」△「日本の文學に就て其一（國文）」△十日「國民精神詔書講解つづき（修身）」「文學に就て其二（國文）」宗教とは何ぞ（宗教）」△十一日「教育勅語講解（修身）」「漢文學に就て（漢文）」「佛教とは何ぞ（宗教）」△十二日「戊申詔書講解（修身）」「漢文學に現れたる道德論（漢文）」△「生活と宗教（宗教）」△十三日「道德の五綱（修身）」「農村問題に就て其一（科外）」「必要なる外國語のお話」△十四日「我國の現狀と青年の自覺（修身）」「農村問題其二」「茶話會」「閉會の挨拶」。

大阪教報 △三月一日和井田宅にて「自由と平等」石井氏「三德の本師」上田師△五日蓮成寺にて「唱題修行に就て」光好氏「强盛の信」京藤師△九日大森宅「信は道の元」京藤師△十日蓮成寺「日蓮聖人の宗旨」和井田氏「報恩鈔」上田師△十二日堂閣寺にて「四恩の道德」井口氏「信仰の力」京藤師△同日光好宅にて「所感」井口氏「邊滅無常」上田師△十四日平山宅「法華經要義」京藤師△十八日德永宅にて「正しき道」石井氏「彼岸會に就て」京藤師△二十日堂閣寺にて「五種の妙行」和井田氏△同日清原宅にて「彼岸會に就て」和井田氏「信仰の必要を論ず」京藤師△二十一日放送局にて「電波を通じて佛教より觀たる常識」本多大醫正殺下△同日婦人會「釋尊の成道に就て」本多殺下△二十二日實業會館にて「予の法華經に對する感激」本多殺下△二十五日堂閣寺にて「三大秘法」石井氏「佛教の概要」上田師△何れも頗る盛會多大の効果を收めた。

金澤第二教報 △家庭講演 三月五日午後七時市内長土塀町澤田榮次郎方にて「信後の生活」能仁一十師聽衆五十八名△宗教講話三月八日午後七時市外釜屋本城寺に於て「法華信仰の四大要綱」能仁一十師聽衆三十名△宗教講話三月十一日鶴井縣今庄善神寺に於て中山事信師能仁一十師出演△彼岸說教三月十八日より二十四日まで毎夜市内本長寺に於て福田久之輔氏木郷常次郎氏青木メヨ女史杉田常敬師等前講し能仁一十師は「釋尊の生涯と其思想」と題し釋尊の事蹟悲を力說せり聽衆毎夜百餘名盛會を極む△慶樂會三月廿一日午後一時市内本覺寺に於て開く芝野醫師本郷常次郎氏能仁一十師の講演があつた△彼岸說教三月廿四日午後一時市内立正寺に於て執行杉田常敬師能仁一十師の法話△家庭講演三月廿八日午後七時市内本多町河合梅子宅にて「死と生とを考えて」能仁一十師講話

石橋會卒師葬儀 金澤市中本多町本行寺住職石橋師は永らく病床に呻吟せられけるが養生遂に不叶三月廿四日午前九時遷化せられた京都より有田宏道師來澤二十八日午後一時極めて質素にして且つ嚴肅なる葬儀は執行された有田宏道師の歎讃文に依りて師の生立を偲び能仁一十師の教訓に依りて本行寺經營のため苦心されたことゝ清貧に甘じて金澤教壇に盡されたことも今更の如く偲びて泣かないものは一人もなかつた。

社寺建築設計監督

及臺灣檜材の安價提供

（三年以上水蓄乾燥材）

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及內務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の計設又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候

追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

（充分なる水蓄乾燥をなしたる臺檜最も優良なるも水蓄不充分なる臺檜は于割狂ひ等の缺陷多きものであります）

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地
（明治神宮外苑內日本青年館正門前）
社寺工務所
（電話青山六〇二八番）

神奈川縣鶴見町
社寺工務所鶴見支所

福岡市外堅箱町馬出松原
社寺工務所福岡支所
（電話二二三〇番）

大阪市西區市岡町七十九番地
社寺工務所大阪支所
（電話西三二二四番）

臺灣檜材ノ六大特徴
一、耐久防腐
二、蟻害絶無
三、香氣清楚
四、木質堅靭
五、木理整然
六、木色高雅

統一定價

一部	金貳拾錢
半ヶ年	金壹圓貳拾錢
一ヶ年	金貳圓貳拾錢

送料共

廣告料

表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾五圓
半頁	金九圓
四分一頁	金五圓

前金之事

大正十五年四月十七日印刷納本
大正十五年五月一日發行（第三百七十四號）

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
編輯兼發行人 國友日斌
印刷人 名古屋市東區千種町字五反田五二番地 鈴木日雄
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地 三益社

不許複製

發行所 名古屋市東區田代町字城山七十七番地 統一發行所
振替東京五一〇七一番

編輯所 名古屋市東區田代町字城山七十七番地 統一編輯局
電話東五四八七番
振替名古屋一〇八一九番

目次

聖訓摘要……本多日生
教觀不離……本多日生
信仰と疾病……醫學博士　石田誠
國友總監の施政方針を讀みて……小林日種
兒童劇べル……古田昂生
各地通信報導……編輯局

第三十年六月號

教觀不離
6月号 P24—30 7頁
7〃 P27—32 5
8〃 P27—34 8
20
300